

おはなし散歩道

羽根の音

柿市 木村 研

「昔のお正月の遊びと
いったら、羽根つきだろう
なあ」

おばあちゃんが、押入
れから、薄い板のような
羽子板を出して言った。
「羽根つき」

「ああ、この黒い実のつ
いた羽根を、羽子板で突
くん」

おばあちゃんは、コン、
コンと、羽根を突いた。
「バトミントンみたい
ね？」

かおりは、メモを取り
ながらきく。学校の宿題
で、「昔のお正月のあそび」
を、聞いていたからだ。

「そうだね。一人で、空
におかして羽根をついて、
落としたりが負け。負
けたら、顔に黒い墨をぬ
られるんだよ」

おばあちゃんは、
「この羽子板は、かおりに
あげよう。墨も一緒に持っ
ていくといい」といって、
嬉しそうに笑った。
おばあちゃんの家から
帰るときに、「かおり、何
してんだ？」と、同じクラ
スの耕太が声をかけてき
た。
「今、おばあちゃんに、
宿題を聞きに行ってきた
んだ」
「宿題って？」
「昔の遊びのことよ」
「そうか」
耕太は、忘れてた、とい
うように、丸い鼻の頭を
ピンと指ではじいた。
「羽根つきよ。やってみ
る？」
かおりが、羽子板で、コ
ン、コンと羽根を突いてみ
せると、「いいよ。羽子板
を受け取って、耕太が、来
いよ、というように、高尾
山の麓の空き地に入っ
ていった。やる気満々だ。
「勝負よ。交代で羽根を

突いて、落としたりぼうが
負けよ。負けたら罰とし
て顔に墨をぬるのよ」
かおりは、おばあちゃ
んから聞いたルールを説
明した。
耕太は、スポーツが得
意だ。



勝負が始まった。
コン、コン、コンと、いい音
が続いていく。
かおりは、おばあちゃ
んは、こんな遊びをして
いたんだ、と思ったとた
ん目がそれで空振りをし
てしまった。
かおりは、負けた。

耕太は「約束だぞ」と、
筆に墨を含ませた。
「だ、だめよ。冗談よ。
冗談。かわいい女の子の
顔に墨をぬる気？」
かおりは、せまい空き
地を逃げ回る。
その時、「私にも、その
羽根つき、やらせてもら
えませんか？」とお坊さ
んが言った。
耕太は、びっくりした。
「負けたら、顔に墨をぬ
るんだよ」
「よろこんで、ここに」
お坊さんは、にこにこ笑っ
て、つるつるの頭をだした。
耕太とお坊さんの一騎
打ちが始まった。
「さあ、どこからでもい
らっしゃい」
お坊さんは、たすきを
かけて、着物のそでを縛
ると、勝負が始まった。し
かし、身体はついていかな
い。すぐに、空振りをして
羽根を落としてしまった。
「いやあ、強いなあ。
参った」そういうと、
「さあ、どうぞ」
と、頭を出した。
「いいいの？」

耕太は、「約束手紙」
と、筆に墨を含ませた。
「だ、だめよ。冗談よ。
冗談。かわいい女の子の
顔に墨をぬる気？」
かおりは、せまい空き
地を逃げ回る。
その時、「私にも、その
羽根つき、やらせてもら
えませんか？」とお坊さ
んが言った。
耕太は、びっくりした。
「負けたら、顔に墨をぬ
るんだよ」
「よろこんで、ここに」
お坊さんは、にこにこ笑っ
て、つるつるの頭をだした。
耕太とお坊さんの一騎
打ちが始まった。
「さあ、どこからでもい
らっしゃい」
お坊さんは、たすきを
かけて、着物のそでを縛
ると、勝負が始まった。し
かし、身体はついていかな
い。すぐに、空振りをして
羽根を落としてしまった。
「いやあ、強いなあ。
参った」そういうと、
「さあ、どうぞ」
と、頭を出した。
「いいいの？」

耕太は、かおりをみた。
「いんじやない」と、かお
りが言うのと、耕太は、ふで
にたつぷりスミを含ませ、
大きな「X」を書いた。
すると、お坊さんは、
「やあ、ありがとう」と、
二人に手を合合わせた。
「どうして？」
「縁起物ですよ。縁起
物。鬼は墨が嫌いといひ
ますからね。だから昔の
人は、負けたら墨をぬる
なんてルールを考えたん
ですよ」
そういうと、お坊さん
は、「はい。お邪魔しまし
たね」と、お礼をいって、
高尾山の参道を上って
いきました。
「ふーん。鬼って墨が嫌
いなね」
「だから、墨をぬるのか」
かおりと耕太は、顔を
見合せて、どちらから
ともなく、また羽根つき
を始めました。
コンコン、コンと、羽
根のいい音が、いつまでも
続いていました。
(さし絵・小出 茂)

地藏尊の宗教

③

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

閻魔様の慈悲

慈悲は仏教のもっとも
重要な徳目のひとつであ
る。このことは誰もが認め
ることであるが、地獄が
慈悲の場所といたら納
得であるであろうか。地
獄で亡者が舌を抜かれた
り血の池に落とされたり
する話は、慈悲とは正反
対と感ぜざるを得ないだ
ろう。

慈悲の思想は最初の
仏教から説かれている。
ブツダによれば、他者も
自分と同じく自己愛があ
るのだから、自分がされて
嫌なことは他人にしては
ならない。殺生はその最た
ることである。そうした
慈しみ、憐れみの気持ち
を生きてし生けるものに
持つべきであるというこ



奈良・白毫寺の木造閻魔王坐像(重文・鎌倉時代)の図 ©2016 金岡瑠璃子

とが「スッタニパータ」な
どの古い經典にブツダの
言葉として伝えられてい
る。のちに慈悲の思想は
さらに整えられて、大乘
仏教の百科事典ともいっ
べき「大智度論」には、「慈
は一切衆生に、楽を与え
ること、悲は一切衆生か
ら「苦」を抜くこと、すな
わち「与楽拔苦」と説明さ
れている。言い換えれば、
慈悲とは他者が嬉し
きに一緒に喜び、他者が悲
しいときに一緒に悲しむ
心である。そうすれば喜
びは倍加し、悲しみは半
減するであろう。
仏教の本質に慈悲があ
るとすれば、仏教で説く
地獄もまた無慈悲である
はずがない。慈悲に満ちた
地藏尊が地獄に現れるの
はそのためであるが、無慈
悲に見える閻魔様も実は
慈悲の仏とされている。わ
れわれは小さい頃、「悪い
ことをすると閻魔様に舌
を抜かれる」と叱られ、閻
魔様といえは恐ろしいだ
けの判事像を形成してき
た。しかし恐ろしい裁判

官としての閻魔様は、漢
民族のあいだでつくられ
たイメージであって仏教
本来のものではなく、そ
の官服や髻も六朝から唐
にかけての判官裁判官
の姿である。本来の閻魔
はインドのヤマという死
者の国の王者で、それが
仏教に取り入れられて地
獄の王、閻魔王になった。
『世記経』という原始
經典を見ると、閻魔王は
罰を与える判事ではなく、
地獄に堕ちた亡者と共に
苦しむ者として描かれて
いる。それによれば閻魔
王は、一日に三回、熱で溶
けた銅を大きな鑊で飲み、
悶絶して燃え尽きてしま
う。しかし時が来ると元
の姿に戻り、再び銅を飲
まなければならぬ。恐
怖のあまり鑊を見ては逃
げ回る閻魔王に地獄の
君主の威厳はまったくな
い。閻魔王のこうした行
為は共業といわれ、他者
と行為を共にすることを
いう。この場合の他者は
地獄に堕ちた亡者たち、
行為は地獄の苦しみであ

る。閻魔王が亡者と苦し
みを共にすることこそ慈
悲であり、それによって亡
者の苦しみは軽減され、
救われる。
地獄に堕ちた亡者は、
心の弱さや成育環境の劣
悪さによって罪を犯した
者たちである。業の思想
によれば、他者に及ぼし
た行為は必ず自己に帰る
とされる。これが仏教の
因果応報の思想である。
善も悪もその責任の第一
は自己にある。刀の山を
登ったり焦熱で焼かれた
りする痛みも、自己が他
者に与えた苦しみに他な
らず、閻魔王から与えら
れる罰ではない。閻魔王
はそれを共有することに
よって、亡者を救ってくだ
さる。地獄が慈悲の場と
される所以である。
大地の底で慈悲心を発
揮する閻魔王は、漢民族
の仏教を経て日本に至り、
大地の恵みを持った地藏
尊の別の姿と考えられる
ようになった。次回地
蔵と閻魔の一体説を見て
みたい。